

藤森照信さん設計

縄文香る樹皮ぶき

竪穴住居WS始動

ちのDMO 市民参加で材料調達

ちの観光まちづくり推進機構(DMO)は、茅野市出身の建築史家、建築家の藤森照信さんを講師に招き、住民とともに樹皮ぶきの竪穴住居を建てるワークショップを進めている。11月16日までの土日祝日に開催し、完成を目指す。2回目となる15日は青少年自然の森で藤の根やつるを調達

した。住居の骨組みを作る際にロープのように使う。市尖石縄文考古館に隣接する同森の一角に地域住民の方を借りながら竪穴住居を整備する取り組み。藤森さんが設計を手掛け、樹木の伐採管理、治療、活用などを一体的に行う「木葉社」(茅野市ちの)の技術支援の下、縄文人が使っていた可能性がある材料や道具を使って住居を制作する。



藤の根を取る参加者

「藤森式」と称する竪穴住居の屋根はかやではなく樹皮ぶき。14日の初回講座は住居の材料となる樹皮や木材などを集めた。石斧を使い、ヒノキの伐採に挑戦した。

15日は小学生3人を含む16人が参加した。男性の大人たちが斜面を下って立木に絡みつく藤のつるや地中の根を採取した。女性や子どもたちは、藤の細かな根を切り落としていた。水に浸してしなやかにしてから使う。

茅野市在住で米国出身のラスコー・セバスチャンさん

作る作業は面白いし、まだまだ続くので、また参加したい」と話していた。

同ワークショップは県の地域発元気づくり支援金事業。今後は21、22日と11月2、4日、同16日に開催して完成させ、24日に完成を祝う。定員は各回30人。対象は小学3年生以上で、子どものみの参加希望の相談にも応じる。参加費用は1人1回3000円(昼食付き)。問い合わせは電子メールでちのDMO(ask8@chinotabi.jp)へ。

(野村知秀)

(40)は「人間の争いがなかったといわれる日本の縄文時代の調和的な暮らしやその精神性を海外の人にも知ってほしい。この貴重な体験をSNSで発信する」と語った。同市潮東小学校5年の男子児童(11)は「参加しようと思ったのは茅野市民だから。みんな住居を